

From the World Conference

第1回日本腫瘍循環器学会 学術集会

2018年11月3～4日

日本・東京

向井 幹夫 地方独立行政法人大阪府立病院機構大阪国際がんセンター
成人病ドック科主任部長

2018年11月3～4日に、第1回日本腫瘍循環器学会学術集会が畠清彦会長のもとで“Harmonization of Heart and Cancer Experts —腫瘍専門医と循環器専門医のチームワークを作ろう！—”をテーマとして開催された(写真1)。満席に近い聴衆が集まったメイン会場では、開会式に続き最初のシンポジウム「腫瘍専門医から循環器専門医への情報：循環器に影響の高い抗がん剤治療」が、石岡千加史先生と室原豊明先生の座長により開始された。日本腫瘍循環器学会は“がんと心臓”という従来はほとんど触れ合うことのなかったテーマのもと、まったく新しい領域における学会であるにもかかわらず、特別講演やシンポジウムなど魅力ある企画とともに130題余りの一般演題発表が集まり、2日間で500名を超す参加者があり、大変充実した内容であった。

がんと循環器の新しい関係

日本腫瘍循環器学会は、がんと循環器の両者が重なった領域を扱う新しい学会として2017年に設立され、同年12月に東京大学医学部附属病院において第1回理事会が開催された。本学会は、がん患者に対する最善の治療をめざし、がん診療における循環器領域の診療ならびに心血管系合併症(心毒性)において研究調査、知識の普及、啓発、学術活動を行い、がん治療の適正化と質の向上を図り、医学全体の発展と国民の健康増進に寄与することを目的に設立された。学会が設立された背景には、わが国における高齢化と食の欧米化による生活習慣の変化により、疾病構造が大きく変化したことにある。従来は認めなかったがんと循環器疾患の両者を合併する病態や、新しい分子標的薬の登場により新たな心毒性が出現し、その対応が必要となった。

また、免疫チェックポイント阻害薬に代表される免疫療法の登場は、がん治療が医療経済学的に注目される一方で、循環器領域においてもがんに関連した領域の研究は創薬も含めた新しい考え方を出現させた。本学会の理事は循環器領域が3分の2、腫瘍領域が3分の1という割合で構成されており、そして腫瘍循環器学は基礎医学、臨床薬理学、免疫学など、多くの領域から注目されている。

理事長・会長講演

初日の午後からは、理事長講演として小室一成先生より「日本腫瘍循環器学会の設立にあたって」と題して、この新しい学会が設立されるにあたっての背景ならびに経過について説明がなされた。ここでは、本学会の設立意義ならびに今後の方針が示され、改めてこの領域がこれからの医療において重要な位置を占めることが強調された。引き続き、畠清彦先生より「腫瘍専門医と循環器専門医のチームワークを作ろう！」と題して会長講演が行われた。ここでは腫瘍専門医の立場から、従来は全く触れ合うことのなかった2つの領域が、この学会を通じて交流することにより新しい見地から新しい発想が生まれることが示された(写真2)。ここで特筆すべきは、理事長講演ならびに会長講演ともに、お2人の共通の恩師である高久史磨先生が座長を務められたことであり、名実ともに第1回の学術集会にふさわしい講演であった。

特別講演

1日目の特別講演1では、米国循環器学会(ACC)